

## ■ 来週の日銀会合は結局「大山鳴動して鼠一匹」？

昨日(7/25)、欧州(EU)連合のユンケル欧州委員長は米ホワイトハウスを訪れ、トランプ米大統領と会談。自動車を除く工業製品の関税撤廃や、米国産の大豆や天然ガスの対EU輸出拡大に向けた貿易交渉を始めることで合意した。

最大の焦点であった自動車への関税については、とりあえず「交渉中」は追加措置を棚上げ(留保)する方針であると、市場にはひとまず安ど感が広がった。結果、会談前に一時1.1665ドル近辺まで下押ししていたユーロ/ドルが会談後には強含みの展開に転じ、足下では1.1740ドル処まで値を戻す展開となっている。

ただ、ある程度は想定されていた会談結果でもあり、もともとユーロが極端に下落していなかった分、戻りもさほどではなかったという印象でもある。ユーロ/ドルの7/25の日足ロウソクが一目均衡表の日足「雲」下限を上抜けたことには一応注目しておきたいが、なおも「雲」のなかであることは動かしようのない事実であり、とりあえず当面の戻りは1.1750ドルあたりまでに限られる可能性が高いと個人的には考える。

米欧間における追加関税の実施がひとまず見送りとなったことは当然、日本にとっても朗報であったと言える。まして、様子見ムードが強かった米株価が「米欧合意」の報を受けた途端に急伸する展開となったことも、どちらかと言えばドル/円と日本株の上昇に結び付きやすい材料となったはずである。

それにも拘らず、足下ではドル/円が下方になびきやすくなっているとしか思えず、結果的に日本株の動きもあまり冴えない。それは、言うまでもなく来週30-31日の日銀金融政策決定会合をやや過剰に(?)意識しているがゆえであるということになる。

本日(7/26)付の日本経済新聞は、日銀が31日の会合で「年6兆円買っている上場投資信託(ETF)の購入配分の見直しを検討する」と報じている。同日の未明(日本時間)、このことが事前に市場へ伝わったことで、一時的にも市場が神経質になってドル/円がグッと下押し場面もあった。とはいえ「TOPI連動型を増やし、一方で225連動型を減らすことを検討する可能性」については以前から言われていたことで、むしろそのように対応すべきであろう。

そもそも、先週20日に突然、日銀が情報を発信(リーク)し、そのことが様々な憶測を呼んでいるわけであるが、筆者を含めて市場には「結局のところ、大した事柄は何も出て来ないと見る向きが多い。それは、メガバンク株をはじめとする銀行株の足下の値動きからもうかがえるところであり、その割に外国為替市場がやけに日銀の出方を強く警戒しているように見えるところがやや滑稽であったりもする。

もちろん、まったくの「ゼロ回答」ということはないのかもしれない。それでも、日銀は金融政策の「柔軟化」は「引き締め」とは一線を画すものであることを頑なに主張するだろうし、結局のところ大勢に影響を及ぼすような決定が下されるはずもないと見る。

果たして、今回の「日銀リーク」はどの方向に向いて行われたのか。配慮したいのは、国内金融機関、首相官邸、そして米政権と様々であろう。なかでも、米トランプ政権に対して「今、日本の政府・当局はどのような姿勢で臨んでいるかを示したい、理解してもらいたい」という思いが最も強かったのではないかと、実のところ筆者は個人的に考えている。

ロイターも一部の見解として伝えていたが、その後のトランプ氏は「中国や欧州が為替操作を行っている」と名指しで強く批判しながらも、日本のことについては言及していない。単に「忘れていた」のか、あまり「関心がない」のかもしれないが…。

いずれにしても、結果的に来週の日銀会合が、いわゆる「大山鳴動して鼠一匹」という結果になれば、あらためてドル/円、クロス円は買い直されやすくなると思われる。その場合、注目しておきたいことの一つは「ドル/円の月足・終値が31カ月線や月足『雲』上限を上抜けるかどうかであろう。

(07月26日 10:50)